

12	上野国山田郡桐生新町寄場組合 村々匱(あら)絵図面(写) *縦 40.7 cm×横 53.3 cm	明治元 (1868)年	絵図 1 舗	赤石氏 収集 50
	桐生新町(黄色い長方形)、寄場組合村々(黒枠の長方形)や、渡良瀬川などの河川(青い太線)、山・丘陵(灰色)が明瞭に描かれている絵図です。			



下方に列記されているのは、村々の村高(村の生産量を石高に換算したもの)です。

これらの村々は桐生新町を寄場(よせば、組合の中心地)とする村々です。「明治の大合併」(明治22(1889)年)まで、全国には多くの村がありました(一般的に村の規模は、現在の大字と同じくらいだったといわれています)。



関東の場合、領主が多く、複数の領主がいる村もあったため、治安が悪化した江戸時代後半になると、幕府は思うように治安を維持することができませんでした。そこで文政10(1827)年、寄場組合村を作り、組合を通じて博徒・浪人等の取り締まりや命令の伝達を図りました。

なお、当時の寄場組合村々が「平成の大合併」などで1つの自治体になった場合もあります。